

コンプレックスから誇りへ

～L.A.での絆が私に教えてくれたこと～

同志社大学社会学部5年 高岸 茉莉子

私は自分が日本人であることをコンプレックスに思っていた。日本で美德とされる謙虚さ、気配りや遠慮の精神などは、グローバル化によって国家間競争が激化しているこの現代社会においては全て不利にしか働かず、マイナスの側面しか生み出さないと思っていた。つまり日本人であることそのものがグローバル競争の中では克服すべき弱点に思えた。

ただその国民性をコンプレックスとまでに思う理由は、誰よりも私自身の中に、いわゆる典型的な日本人的要素が強いことを認識していたからだ。自己主張出来ない、すぐ人と比べる、自分に自信が持てない、私はそんな自分が好きになれず、どこかそれを日本の環境のせいにしてきた。日本人として生まれたから、日本人として育ったから、私はこういう性格になってしまったと思っていた。私は次第に、そんな日本を飛び出しどこか違う場所に住みたいと思うようになった。そして私は実際に、1年の交換留学のためアメリカに飛び立った。私は環境を変え、日本人と距離を置くことで、日本人の民族性に依存しないアイデンティティを確立させ、自分の中のコンプレックスを払拭させたかった。

留学開始当初、私は日本人が全くいないコミュニティを拠点にし、日本人はもちろん、日本に興味があるという外国人とも関わらないようにしたかった。しかし残念ながら自分の英語力にはまだ不安があったので、一人や二人だけでも日本語を学びたい外国人と友達になって、私は英語、相手は日本語を勉強する、いわゆるスピーキングパートナーを作ろうと思った。

年度で最初の学期である秋学期が始まり、私は日本人と、日本語を勉強したいアメリカ人が集まるクラブの初回ミーティングに参加した。そこには日本人を含めアジア人が多かったが、欧米人も何人かいるようだった。初回ということで、私達は小グループに分かれて自己紹介をした。私はその時、その場では数少ない欧米系の顔立ちの女の子と同じグループになった。後にわかったことだが彼女はロシア人だった。彼女は初対面から笑顔で、愛

想もとても良かったので、私は彼女と仲良くなれることを期待した。

その自己紹介で、「好きな歌手は？」という質問に対しグループ内で順々に回答していた所、ロシア人の彼女が口にしたのは、私が中学の時から熱狂的に好きであった歌手の名前であった。私はそれを聞いた瞬間、嬉しさと驚きの余り悲鳴をあげ、私も大ファンであることを彼女に告白し、二人で興奮を分かち合った。ミーティング終了後も引き続き彼女と話していた所、彼女は日本の音楽は相当聴いているらしく、ジャンルはロックからボサノバ、有名どころからマイナーな歌手まで、私の知っている日本の歌手のほとんどを知っていた。私は彼女の日本に対する知識の量に驚いた。彼女は日本に二か月ほどの留学経験はあったものの、日本語で会話するにはまだまだ練習が必要だったので、私達は即座にスピーキングパートナーになることを約束した。

翌週から早速私達は毎週夕食を共にした。私は英語だけで話したが、彼女は日本語にまだ不安があったので、出来るだけ日本語を使うという約束で会話を進めた。私は日常で直面する異文化トラブルについて話す事が多かったのだが、それに対し彼女はたくさんのアドバイスをくれた。例えば私の二人のルームメイトのうち一人とはかなりトラブルがあった。その状況を説明すると彼女は、アメリカに住む人によく見られる性質や、その対処法、相手に何か主張するときのいい英語表現などを教えてくれた。彼女は普段から周りの人間をよく観察しており、その分析はとても詳細で、実際の状況にも良く当てはまっていた。私はそんな彼女の鋭い洞察力に感心していた。

秋学期が終わり、私達は一ヶ月の冬休み期間に、二人で旅行することにした。行先は滞在先のロサンゼルスから飛行機で一時間のラスベガスだった。二人の会話にはまだ恥ずかしさときちなささがあったが、それでも二日目の陽が傾く頃には、私達も少しずつ本音で会話をするようになっていた。その日の夜、彼女は今までは決して口にしなかった、日本人に対する否定的な意見を言い出した。彼女は中学生の頃から日本の音楽や文化が好きで日本語を学び、高校の時も日本へ短期留学をしたが、そこで日本人の嫌な側面をたくさん見たという。具体的に何かと私が尋ねると、それは日本人が物事に本気で取り組んだり、本音で話をしたりすることを恥ずかしいことだと考える傾向だ、と彼女は述べた。私はこの彼女の突然の告白に衝撃を受けた。彼女がたった二ヶ月間の滞在の間にそこまで鋭く分

析したことへの驚きもあったが、私はそれ以上に、彼女が日本人に対する正直な感想を、日本人である私に述べてくれたことに感激したのだった。例え日本語を勉強している人でも、日本人の持つマイナスの側面は知らない、あるいは知っていても日本人の前では決して言葉に出さない人が多い様に思う。私はそういう本音を隠す人々とはあまり仲良くする気になれなかった。しかし彼女は違った。私は彼女に対してならば、私がずっと抱いていた日本人に対する嫌悪感や、自分自身へのコンプレックスなども正直に話せると思った。そこから会話は一気にヒートアップし、その日の夜は、私は拙い英語を通じてではあったが、今まで思っていたことを少しずつ暴露した。私は日本ではうまく見つからなかった「本音」で喋れる友達をアメリカで見つけられたことに感動を憶えた。

この二泊三日のラスベガスの旅を通じて、私達の距離はぐっと縮まった気がした。新しい学期からは私の韓国人の友達も加わり、三人で夕食を共にしたり一緒に勉強したり、中間試験の後に遊びに行ったりして、より多くの時間を一緒に過ごした。

しかし仲が深まるにつれ、彼女の中に元々あった日本人に対する嫌悪感が露わになってきた。物事をはっきり述べる彼女は私に対し、日本人は神経質で、排他的で、自分の意見をはっきり言わない臆病者だと、そういう言い方をよくしていた。彼女のすぐ物事を単純化し、あたかもそれを日本人全員に当てはまるかの様な言い方をするのはあまり好きになれなかったが、それでも日本の歴史や文化を学び、実際多くの日本人を知っている彼女の発言には説得力があった。それに私は、そういったアメリカでの「日本人に対する偏見」は、彼女からだけでなく他の友達からも少し感じていた。周りと自分を切り離して考える傾向が強いアメリカの地において、一般に周りに気を遣いすぎると言われる日本人の性格は、煙たがられることも少なくないと感じた。実際に、私はアメリカでも日本人同士でしか喋らない人をたくさん見た。恐らく彼らも、アメリカに来た当初は外国人の友達を作ろうとしたものの、結局上手く適応出来ず気持ちが折れてしまったのであろう。

私も最初は、日本人と関わるのを出来る限り避けようとしていた。しかし日本で二十二年間生まれ育った生粋の日本人である私にとって、私の中では正反対とも言えるアメリカ文化への適応は、決して容易ではなかった。私は祖国に対し嫌悪感があったが、自分を日本人という枠組みから外して考えられていた時は、その嫌悪感を堂々と主張出来た。しか

しアメリカで数ヶ月の時を過ごし、自分の中の日本人らしさがどんどん明確になるに連れて、その嫌悪感是自己に対するより強いコンプレックスへと変換され、いつの間にか上手く自己主張出来ないようになっていた。

しかし一方で私は、日本人のネガティブな側面を指摘する彼女や他の人に対し、反感を抱くようにもなった。というのも、日本人の協調や謙遜を美德とする精神は、個人の意志によって得たのではなく、日本での教育や社会によって自然と形成されたものである。そのため日本で生まれ育った我々がその精神を否定されたところで、そう簡単に変えられるものではない。しかし、私含む多くの日本人が異文化に上手く適応出来ていない事実を踏まえると、こういった教育方針が存続する以上、日本という国は世界からどんどん孤立していくと思った。

彼女の日本人に対する率直な意見は、直接私のことを指していないにしても、私にとって決して心地のいいものではなかった。何か言い返したくても、うまくできなかった。もちろん彼女の中ではジョークも含まれていたが、私はあまりそれを楽観視出来なかった。私は留学先の目標として心をオープンにし、色んな人と関わるつもりでいたが、留学期間中盤である冬学期には、自分がどんどん内に籠っていているのを感じた。そんな強気になれない自分も嫌で、私の中のコンプレックスは増強される一方だった。

冬学期終了後、一週間の春休みがあった。私はその最終日に足を痛めた。転んだ訳でもなく、もともと足を痛めやすい体質なだけだったが、日々のストレスも災いして足の炎症はみるみる内に両足に広がり、現地で鍼の長期治療を受けることになった。私は留学最後の学期にも関わらず、部屋で安静に過ごすことを余儀なくされ、彼女や他の友達と交流の輪を広げる機会を失った。彼女とは週一回夕食を共にする機会は設けていたものの、私は他の場面で苛立ちを解消させるべく、それまで避けていた日本人との交流を突如活発に行うようになった。留学開始当初一番嫌悪感を抱いていた「日本人とばかりつるむ日本人」に自分になっていることに戸惑いを感じながらも、私は日本人と食事を共にし、他愛ない会話を繰り広げた。日本人コミュニティにいただけで、日本人留学生共通の異文化圏での悩みや葛藤が、言葉にせずとも分かり合えた気がした。それに居心地の良さを感じた私は、ロシア人の彼女と正面から向き合い、自分のコンプレックスと闘う気力を完全に失ってい

た。

夏休みになり、私は滞在期間を延長して夏期講習を受けることにした。年度中と違い人が一気に減るサマーの期間はとても快適で、私も心身共に休ませることが出来た。自分一人で考える時間が持てた私に、一つの疑問が浮上した。彼女は日本人を嫌う理由がはっきりしているにも関わらず、なぜ今でも日本語を勉強しているのであろう。私の帰国日が近づくに連れ、彼女の口から本音が聞きたいと、次第に強く思うようになっていた。

帰国二週間前、私は彼女と一緒にとある美術館に行った。そこは屋外の広大な敷地内に小さな展示館が点在する、自然に溢れた場所であった。ただ私はまだ足の痛みが完治していなかったのも、彼女の気遣いもあり、メインの企画である「クリムト展」だけ観て、後はベンチで休憩することにした。私の帰国は目前に迫っていたので、私達はたくさんのお話をした。二人は次第に、彼女の家庭や過去の話に移っていった。

彼女はロシア生まれで、両親もロシア人であったが、彼女は1歳の頃からアメリカにいるのでほぼアメリカ人と言ってもいいかもしれない。こういう家庭の場合、生じるのが家族間の異文化ギャップである。彼女曰く、一般的にロシア人は性格がきついと言われ、彼女の家では家族間でも暴力的な言葉遣いをするのが頻繁にあると言う。しかし言葉で暴力を受けた場合、それを言葉の暴力で返すというのが、家庭内の暗黙のルールであったという。暴力というと聞こえが悪いが、つまりは自分の受けた屈辱は、自分で反撃しなければいけない。その場で笑って流したり、裏で悪口を言ったりするのではなく、正面から立ち向かわなければならない。これが彼女の受けた教育だと、彼女は説明した。しかしそれは彼女のロシア人家庭内の教育であって、アメリカ人のコミュニティでも通用するとは限らない。アメリカ人も物事をはっきり述べる性質があるが、彼女からすると、それは言葉を武器の様に扱うロシア人の性質とはまた違い、彼女のきつい口調に対し戸惑った反応をするのは、基本的にアメリカ人とアジア人の間に大差はないようであった。しかし彼女は、自分が相手を傷つけていることが分かると、その場では平気を装って笑うものの、後に自分を責めてしまうこともよくあるようだった。自分を上手くコントロール出来ないままに友達を傷つけるのを恐れた彼女は、両親の教育方針に対し懐疑的になり、それに反抗していた時期もあったという。その時の彼女は、自分のありのままの姿を周囲から拒否された

感覚に囚われ、自分の存在自体も否定しかねない心境に陥っていたのかもしれない。

しかし彼女にとって転機となったのが、高校の時の日本への二ヶ月間の留学であった。言葉の武器を携えることなく人と繋がるための術をなかなか編み出せなかった彼女は、日本人の絶えず周囲に気を配ったり、相手を尊重したりする考え方に深い感動を覚え、そこから一気に苦しみから解き放たれたという。私はその話を聞いて、胸がいっぱいになった。私がずっとコンプレックスに思っていた、私の中の日本的性質。それが、全く違う文化背景を持つ人の、数年に及ぶ葛藤に、救いの導きをもたらしたのだ。私は自分が日本人である事を、生まれて初めて誇りに思った。私はその彼女の告白に、心から感謝した。

日本へと飛び立つ前々日、私は彼女から手紙をもらった。そこでは彼女にとって私が、大学で一番の soul-mate だと告白してくれていた。私が足を痛めたせいで春学期はほとんど遊ばず、一緒に勉強することすら叶わなかった。それはもしかしたら私だけでなく、彼女にとっても残念に思うことだったのかもしれない。そう思うと私は、彼女の脆い側面に気づけなかった申し訳なさに加え、切ない気持ちで胸がいっぱいになった。

自分の意見や立場をはっきり主張すること、物事に正面から立ち向かうこと、自分に自信を持つこと。そんな彼女の周囲や感情に流されない生き方に、私は密かに憧れの様なものを感じていた。しかしその一方で、私は彼女の傲慢な態度に不快に思うこともしばしばあり、彼女にそれを指摘することもあった。彼女が私を soul-mate と思ってくれていた理由は、もしかするとその辺りにあったのかもしれない。私にはその意図はなくても、私の何気ないセリフから、人を尊ぶことの意義を、彼女は汲み取っていたのかもしれない。そしてそれは、私が日本で他人を尊重する精神を育む教えを受けていたからこそ、なし得たことなのだろう。

人を傷つけて、心から平気でいられる人はこの世に居ない。自己主張をし、自立した考えを持つ事が促されるアメリカの人々は、国際競争の激化する現状において目指されるべき人物像だと思っていた。しかしそんな社会で生き残るには、周りと自分を切り離し、日々孤独な闘いを強いられることになる。そのためか、彼らには他者を労る気持ちが欠けているのかもしれない。そして日本の、人を尊ぶ文化には、そんな彼らのマイナス部分を補う効果があると言えるのではないだろうか。現に日本人の心情などが存分に描かれた日本の

漫画・アニメや音楽などは、今日も世界中で人気を誇っている。この事実が、今でも世界中の人が日本的な精神を根強く支持していることを示していると言えよう。例え今後グローバル化が更に進んでも、そういう面での日本人としての誇りは忘れたいと思った。

彼女とは私が帰国した後も定期的にチャット、スカイプをしており、互いの今後の進路を教え合っている。その度に、いつか一緒に共同研究したいねと、二人で笑い合うのであった。

この先も私達は、それぞれの地で色々な人と出会うのであろう。しかし私がアメリカのロサンゼルスで育んだ彼女との絆、またそれを通じて得た日本人としての誇りは、この先も忘れないようにしたい。